

2024(令和6)年度 学校評価の重点目標・評価項目・評価の観点

校教育方針	中・長期目標	次年度への課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校は、教育基本法並びに学校教育法に則り、新しい時代に相応しい健全な家庭人、有能な社会人として、教養豊かなる女性教育を育成することを目的とし、特に仏教精神を基盤とした情操道義の教育に重点をおく。</li> <li>・建学の精神「うつくしく生きる」を基とした教育活動を行う。浄土真宗の教えに基づいた仏さまの教えを通して「大切にされているわたしに目覚めていのちを輝かせる」教育活動を実践する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「いのちの教育」「こころの教育」を理念に据え、「人間力」を養い「学力向上」を実現する教育を実践する。</li> <li>・通いたくなる学校、安心して学習ができる環境をつくり、社会の一員として「生きる力」を育む。</li> <li>・地域から愛され、選ばれる学校になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての学校の活動（添削指導・授業・行事・特別活動など）において建学の精神を基とした活動が実践できるように、職員会議等で意識統一をしていく。</li> <li>・不登校経験者や特別の配慮を必要とする生徒、転入学者、課程変更の生徒など多様な生徒が在籍している。教職員間の情報共有を密にし、共通理解に努め丁寧な指導を心掛ける。また、外部の支援施設と連携指導する生徒はケース会議により情報を共有して個々の特性に応じた指導をする。</li> <li>・本校通信制の様子をより知ってもらうために、学校 Web サイトで情報を効果的に発信していく。また、地域の人々とのかかわりが持てる機会を作っていく。</li> </ul>
	<p>今年度の重点目標</p>	<p>次年度への課題</p>
	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に付けられるようにする。</li> <li>2 生徒と教職員間の関係を良好に保ち、不安や悩みを持つ生徒が安心して相談しやすい雰囲気を作る。それとともに生徒数増に伴う教室の整備をしていく。</li> <li>3 家庭との連携を深めるとともに、地域の方々との連携による学習活動を工夫して地域理解を深める。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に付けられるように支援する。学校でレポート学習に取り組む生徒に対しては個々の生徒に応じて対応する。</li> <li>・生徒と教職員間の関係を良好に保ち、不安や悩みを持つ生徒が安心して相談しやすい雰囲気を作る。場面緘黙の生徒に対しては筆談やスマートフォンのメモ機能等を使い質問に応じていく。</li> <li>・家庭との連携を深めるとともに、地域の方々だけではなく、学園の短期大学との連携による学習活動を工夫する。</li> </ul>

分野	重点項目 (具体的な取り組み)		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
全般	建学の精神 ・「いのちの教育」「こころの教育」を通してまわりからの「働きかけ」や「いのちの尊さ」に眼を向ける。 校長講話(始業式、終業式、課程変更式、転入学式)・積尊降誕会・報恩講・特別活動、ホームルームを実施。	1	学校生活(授業・行事・特別活動など)において、建学の精神を基とした活動ができたか。	B	積尊降誕生会は校長講話と教員1名が感話を発表した。参加した生徒は、自らの生活を振り返り、感話にまとめた。報恩講は本校宗教科の教員による講話を行い、命について考える機会とした。宗教科と連携して、積尊降誕生会は全日制と同じ会場・同日に実施、報恩講は講話の講師も含めた運営を行った。全日制、通信制の両方ができるように会場・日程を含めて年度当初に検討することができた。積尊降誕会・報恩講は原則全員参加としているが、欠席する生徒が多い。この2つの宗教行事の大切さを生徒に伝え、出席率を向上が課題である。	積尊降誕会は全日制と同じ会場で時間を調整して実施する。そのために年度当初に連携をとって計画する。また、報恩講についても宗教科と連携し、通信制の生徒に合わせた行事にするために立案と計画をし、生徒の出席率を向上させる。
	基本:生徒の伴走者としての教育活動に取り組み「BASE」を実施する。 ・B 課題レポート提出状況の把握と提出指導 ・A 生徒の個々に応じた教員からの挨拶や声かけ ・S 掃除をする時間を作るなどの工夫をし、美化に取り組む姿勢を育む。 ・E 登校した生徒が安心して生活できる環境作り	2	普段から B(勉強)A(挨拶)S(掃除)E(笑顔)を意識し、学校生活を送ることができたか。	B	「B」(勉強)の課題レポートについては自習時間に一所懸命取り組んでいた。計画的にレポートに取り組めない生徒には各担任が配信メールで連絡をして提出を促した。「A」(挨拶)では個々の生徒に応じて挨拶と声かけは配慮して行なった。反応ができない生徒、挨拶が返せたり、表情で反応したりできるように今後も継続的に実践していく。「S」(掃除)については、第4時限目が終わった後、残れる生徒で協力し合って行った。「E」(笑顔)については、表情に表せない生徒もいることを配慮して生徒に接した。特定の生徒の言動や行動により、集中して自習に取り組む環境作りが前期はできなかった。医療、各連携機関と協力し進路変更の指導をした。後期は落ち着いた学習環境作りができた。	B」(勉強)の課題レポートについて、提出率で判断して提出を促す指導をする。今年度はそれぞれの担任による指導が主体であった。その事により指導に差が見られたので、来年度は提出率の情報共有をして定例の会議で指導を検討し、共通理解をして生徒の学習支援指導をしていく。
	南無阿弥陀仏の教え ・「大切にされているわたしに目覚めていのちを輝かせる」教育活動を丁寧に実践していく。	3	「私にかけられた願い」に気づき、感謝の心を持って、生き生きとした生活を送ることができたか。	B	積尊降誕会・報恩講などの宗教行事、仏教の授業を通して、「尊いいのち」をいただいていると生きていくということに目を向ける機会を持った。お互いを育てあう「いのちの働きかけ」にまでは理解を深めてはいないが、生徒が何か気づききっかけにはなっていると感じる。	これからも「大切にされているわたしに目覚めていのちを輝かせる」教育活動を丁寧に実践していく。
学習指導	教育課程 ・新課程に移行したが、旧課程の生徒に対しても配慮して丁寧に運用していく。三観点別学習状況の評価の在り方を考えていく。	4	生徒の実態に即して新教育課程の編成およびレポート作成ができたか。	B	三観点別学習状況の評価をできるようにレポートやテストを行い、評価を実施できた。今後はさらにより良い内容にするために各教科担当者努める必要がある。	生徒の興味関心を大切にしながら基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に付けられるようにする。

分野	重点項目 (具体的な取り組み)		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
学習指導	添削指導および授業の工夫・改善 ・生徒の興味関心を大切にしながら基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に付けられるようにする。	5	添削指導や授業において、わかりやすい説明を心掛け、生徒の興味関心を引き出すことができたか。	A	学校生活アンケートでは約 82%の生徒がわかりやすいと肯定的にとらえている(昨年度比+8%)。保護者の約 75%(昨年度比同数)が適切であると応えている。昨年度に比べて生徒アンケート結果がプラスになっている。保護者のアンケート結果からは授業の工夫が課題である。しかし、小学校から不登校の生徒が多く基礎学習を学ぶ機会が少ないため勉強への苦手意識があり主体的に取り組めない生徒もいるのが現状である。特に数学は個別指導が必要なので、サポートの時間に個別に丁寧に指導した。	添削指導では必ずコメントを記入し、またスクーリングにおいては、生徒の学力に応じて説明を工夫する。また、生徒の興味関心を大切にしながら基礎学力の定着を図る添削指導や授業を心掛け、自学自習の学びが身に付けられるようにする。数学は今後も今年度のように個別指導をする。
		6	個々の生徒の単位修得につなげられるよう、指導内容や指導方法の工夫、改善を図ることができたか。	A	週 1 日通学型と週 3 日通学型を保護者懇談会で本人と保護者、担任が相談し通学型を決定し、個々の生徒の希望に合わせて通学型を実施できた。また、レポート提出状況やスクーリングの出席状況に応じて、単位修得のために個別指導や保護者相談、面談を実施した。単位修得が困難な科目については卒業年度を考慮しながら、確実に単位が修得できる科目に絞って学習に集中できるように指導した。該当する生徒については今後も継続指導が必要である。	通信では、教員からの対面による指導を受ける機会が限定される。授業がないと登校しない生徒が多い。そのため通信システムによる連絡と場合によっては保護者と本人と直接話す機会を設け単位修得に向けて相談していく。
	・自習教室に複数のサポート教員を配置し生徒の質問に応えられるような体制にする。	7	自習教室で学習する生徒に対して、集中できる環境作りができ、レポート課題の提出率が向上したか。	B	必要な生徒に対しては個別指導をして課題レポート提出の支援指導を行った。特に数学ではサポートの時間に個別に指導した。課題レポートの提出率の向上のためには今後も支援指導を継続する必要がある。昨年度から特定の生徒がマナーを守れない状況があり指導をしたが、生徒が集中できる環境作りには課題があった。前期の状況をみて医療機関、児童相談所と本人が生活する福祉施設と数回にわたりケース会議を実施して根気よく指導したが改善されなかったため進路変更に至った。	登校時の学習の機会を有効に利用し、担任が直接面談をして本人の困り感を共有して、提出を促すなど個別の学習支援を充実していく。特定の生徒に対しては医療、関係機関と連携して指導をした。今後も連携機関とのケース会議により多方面からの視点による指導は必要である。
・教育のデジタル化を検討・研究していく。	8	ICT 教育の導入について検討・研究ができたか。	D	ICT 教育の導入についての検討・研究については全く進行していない。教育のデジタル化 (ICT の活用) は保護者の経済負担とそれに相当する活用効果の両面を考慮して検討していく必要がある	全日制が使用しているロイロノートの活用、校舎への WIFI の整備等が検討課題である。	

分野	重点項目 (具体的な取り組み)		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
	家庭との連携 ・保護者との連絡を密にして学校方針を理解していただく。	9	学校からの情報を適宜発信し、家庭との連携を密にして学習状況を共有できたか。	A	今年度は業務の合理化を図るために、校務支援教務システム「Student Mypage Lite」を導入した。それによりスクリーニング、レポート、試験の業務運営は一括管理することが可能となった。更に、生徒と保護者はマイページで学習(レポート・試験)の進捗状況を確認でき、自ら学習状況を管理できるようになった。このシステムの導入にともない生徒と保護者への連絡もオクレンジャーからこのシステムに変更した。必要な生徒は、保護者と本人に来校してもらい直接説明し、学習への取り組みの改善のために情報共有を行った。しかし、改善には継続的な支援指導が必要である	今年度導入1年目である。今年度の経験を生かし、来年度はさらに有効活用できるようにする。メール配信連絡だけでなく必要に応じて電話連絡をとり、面談により保護者との連絡を密にして、学校方針を理解していただく。
生徒指導	集団生活のルールとマナー ・まわりへの思いやり気配りができるように促していく。	10	学校生活を送るうえでふさわしい態度やマナーを身に付けさせることができたか。	B	生活アンケートでは生徒の88.6%が校則やきまりを守っていると回答している。授業時や自習室利用時の取り組み態度や姿勢はよい。しかし、前期は反抗挑戦性障害と診断された生徒がマナーを守れない状況があり指導をした。前期をもって進路変更となった。限られた登校日数と登校時間で生徒の変化と自身の背景を把握した事前指導や初期指導が課題である。	外見に表れる生徒の内面的な背景を理解した支援指導が必要である。特に今年度の特定生徒の指導は周囲への気配りができるように個別指導だけでなく、医療と関係機関と児童相談所と福祉施設と連携して指導した。今後も必要に応じてこのような連携指導をする必要がある。
	安心・安全な学校づくり ・生徒の変化に気づき、適切な対応を図る。早期発見と予防に努め、声掛け・個別面談を実施していく。	11	生徒の変化を見逃さず初期対応が適切にできたか。	A	学校生活アンケートでは保護者の約96%が安心して通わせることができると回答している。心身に問題を抱えた生徒が安心して学校生活を送れるように丁寧に指導した。様々な不安や悩みから言動に変化が見られる生徒に対しては、声掛けや個別面談(対話)を通して心の安定を図った。	生徒の変化に気づき、適切な対応を図る。早期発見と予防に努め、声掛け、個別面談を実施していく。

分野	重点項目 (具体的な取り組み)		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と教職員間の関係を良好に保ち、不安や悩みを持つ生徒が安心して相談しやすい雰囲気を作る。</li> <li>教職員間の情報交換を徹底する。</li> <li>スクールカウンセラー利用の調整や声掛けを行う。</li> <li>必要に応じて専門機関等と連携した組織的な支援体制を構築していく。</li> <li>成人年齢の低年齢化に伴い規範意識を育成する最後の機会ととらえ、心の教育を大切にす。</li> </ul>	12	個々の生徒が抱えている課題を共有し、生徒の心の安定をはかる適切な支援ができたか。	A	登校時の様子を観察して必要な生徒には声かけや教員との情報共有をした。特に、不安定な生徒には担任が個別相談を行い、家庭と連絡を取り合った。また、関係機関(児童相談所、家庭支援機関、町村教育委員会)とのケース会議により、生徒の取り巻く生活環境の把握と生徒や家庭に対する支援指導のあり方を検討した。各機関がそれぞれの立場で支援するための情報共有を行い支援指導につなげることでできた。今年度はスクールカウンセラーを希望する生徒と保護者はいなかった。今年度の卒業生に一昨年度スクールカウンセラーを受けた生徒がいた。昨年度は利用を希望しないで安定した生活を過ごすことができた。その生徒は大学進学を決めた。	生徒の良好な関係作り。教員間の直接的、情報共有ツール(アセスメントシート)で情報交換と共有を行い生徒の支援指導に役立てる。関係機関との連携は教頭が窓口となり、各機関とともに支援体制を整え、全体把握をする。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>年2回の懇談会に加え、必要に応じて保護者との面談を行い生徒への支援につなげる。</li> </ul>	13	家庭との連携を密にして、学校教育に対する理解を深めることができたか。	A	学校生活アンケートでは保護者の88%(昨年度77%)が学校は保護者との連携に努めていると回答している。昨年度は前年比-8.5%であったが今年度は+11%であった。各担任の丁寧な指導やスクーリング担当者、サポート担当者の多方面の指導の結果であると考えられる。	学校教育の理解を深める事に困難な事例もあるが、各担任の丁寧な指導やスクーリング担当者、サポート担当者のそれぞれの指導の結果と考えられる。今後も継続的に個々に応じた丁寧な指導を心掛けていく。
進路指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>進学・就職指導の充実</li> <li>多様な生徒の特性をふまえ個々に応じた丁寧な指導を心掛けていく。外部の様々な機関との連携を密にして進路実現のための指導をする。</li> </ul>	14	個々の進路希望を把握し、情報を適切に伝え、本人の希望・適性にそった指導ができたか。	A	<p>年2回の懇談会に加え、必要に応じて保護者との面談を行い生徒への支援につなげた。学校生活アンケートでは保護者の約78%(前年比+6%)が適切かつ必要な進路指導を行っているという回答している。担任は生徒の進路に応じて面接練習や受験対策を行った。さらに卒業後の進路希望に対応するために個々に応じた進路指導に努める必要がある。</p> <p><b>【卒業生32名の状況】</b>  4大:4名・短大:5名・専門:7名  就職:7名・アルバイト4名  未定:5名</p>	個々の進路指導に対応するために、外部の様々な機関と連携してガイダンスを開催し、進路実現のための意識の高揚につなげ、進路について考える機会を設ける。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>段階に応じた進路講話、情報の提供により生徒の進路実現につなげる。また、卒業年度の生徒においては早めに対応する。</li> </ul>	15	進路ガイダンスを通して、自分自身について考え、進路意識を高めることができたか。	A	ホームルーム教室や事務室の掲示板に進路イベントの案内や進路関係の書類を掲示し、生徒に伝わりやすいように工夫した。	進路情報の充実・精選を図り、実情にあった内容の提供をする。

分野	重点項目 (具体的な取り組み)		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
進路指導	・効果的な実施後の振り返りができる体制を整えていく。	16	模擬試験や検定試験などの案内を行い、実施後の効果的な振り返りを行えたか。	A	進路情報の精選を図り、実情にあった内容の提供をする。特に卒業年度の生徒には模試の案内と校内での実施をした。志望校が決定した生徒には、模試の結果を元に個別に面接指導や志望理由書の指導をした。模試や検定に意欲的に取り組むために、今年度は昨年度の向上策に揚げた進路実現までの流れを具体的に説明する進路ガイダンスを開催した。	段階に応じた進路講話、情報の提供により生徒の進路実現のための意欲につなげていく。内容は、実際の進路活動に活かすことができる企画、自己実現につながる企画を計画する。また、2組の後期の後半に生徒・保護者対象に進路ガイダンスを実施した。来年度以降も継続していく。
特別活動	特別活動の内容の充実・改善・実施 人間性を育む場面となる校外学習や行事の充実を図る。	17	生徒が興味関心を持ち、主体的に学べる特別活動が実施できたか。	A	前期には「茶道体験」を実施。「名古屋港水族館」・「映画鑑賞」を実施した。後期は「クリスマス会」、「パーソナルカラー診断」を実施した。多くの生徒が参加し交流の場となった。人と関わる活動や人と関わるのが苦手な生徒でも参加しやすい活動をバランス良く計画する必要がある。来年度に繋げるために、今年度は特別活動に参加した生徒にアンケートをとり、企画の振り返りをまとめた。	さまざまな活動を計画、実施して、人間性を育む場面となる特別活動を生徒アンケートを元に、校内外で個人や友人と参加できる活動の両面で企画する。
学校運営	円滑な学校運営 ・職員会等を利用して通信への理解を深めていく。	18	学校全体の教育活動が円滑に進むように全日制課程との効果的な連携を図ることができたか。	B	全日制と共通である進路(特に就職関係)、奨学金の説明と申し込み、各種検定・模試等は全日制と連携して実施した。通信制で授業や行事がある時には、全日制の生徒が入室したり、騒いだりしないようにあらかじめ伝え、大きな支障はなかった。	全職員が全日と通信の兼務であるが、実際、通信の授業を担当していない場合、なかなか通信への理解は深まらない。そのため、職員会等を利用して通信への理解を深めていく必要がある。
	・生徒のデータの管理・編集を徹底するとともに情報共有をしていく。	19	生徒のデータ管理と正確な資料作りにより、校務と各指導を円滑に進める新データシステムの導入ができたか。	A	IT化により業務の合理化を図るために、校務支援教務システム「Student Mypage Lite」を導入した。それによりスクーリング、レポート、試験の業務運営は一括管理することが可能となった。更に、生徒と保護者はマイページで学習(レポート・試験)の進捗状況を確認でき、自ら学習状況を管理できるようになった。また、日常の登下校もQRコードの読み取りにより容易に管理できるようになった。更に生徒指導要録と調査書も作成しやすくなった。このシステムの導入にともない生徒と保護者への連絡もオクレンジャーからこのシステムに変更した。	新システムを導入して合理的に業務が運営できた。来年度は更に生徒の学習状況の把握等で機能を有効活用する。

分野	重点項目 (具体的な取り組み)		評価の観点	評価	成果と課題	改善・向上策
学校運営	・校内施設・設備の不備を点検し、安全で学習しやすい環境づくりに努める。	20	校内施設・設備の不備を点検し、安全で学習しやすい環境づくりのため、改善を図ることができたか。	A	生徒昇降口の扉を押し引き型からスライド型にした。	スムーズに出入りができるようにし、ガラス部分を多くし、暗く感じる昇降口を明るくした。
	・本校通信制の学びの特徴について周知していく。	21	学校説明会と学校見学(随時)を実施する。また飯田下伊那地域と上伊那地域で開催される不登校生徒の合同相談会に参加して、本校の情報提供ができたか。	A	今年度は全日制の進学説明会の同日(11月と12月)、全日制進学コースの説明と同時(午前)2回実施し、相談者も増加した。その他、中学校を通して学校見学および個別相談を随時受け付けた。転入学希望者にも同様である。また、不登校生徒の場合、本人と保護者の両者がそろって学校説明を受けられない場合もあるが、保護者のみにも対応した。県教委南信教育事務所主催の「不登校生徒の進学相談会」が開催され、飯田会場(2回)上伊那会場には10月から教育協力連携施設として開設した「伊那西学習センター」でブースを設け対応し、多くの相談者に対応した。	多様な生徒を受け入れている通信制へのニーズは高まっている。本校通信制の学びの特徴について周知していく。最初から通信制を考えて相談するケースが増加傾向にある。いずれにせよ生徒および保護者の不安に寄り添える対応を心掛ける。
	開かれた学校づくり ・本校通信制の様子をより知ってもらうために、学校Webサイトで情報を効果的に発信していく。	22	ホームページに掲載する内容の工夫改善を図り、本校の学びの特徴がわかる情報を提供できたか。	D	学校Webサイトで日常生活の情報を見やすく公開した。担当がその他の校務で忙しいため、昨年度のように発信することができなかった。互いが協力し合い発信する必要がある。	本校通信制の様子をより知ってもらうために、学校Webサイトで情報を効果的に発信していく。
	・地域の方に来校していただき講演していただくなど生徒の学びを深めるなどの連携を図る。特に総合的な探究の時間においては、地域の方の協力を得られると学びがより深まると考える。	23	保護者や地域との連携強化を図る取り組みを行うことができたか。	A	「総合的な探究の時間」において飯田市産業振興課に依頼し、地域の文化に焦点をあて、伝統工芸文化特に、「水引」についての講演を「関島水引店」の社長関島様お招きし講演を実施し、今後の飯田下伊那地域の理解と今後の将来について考える機会とした。	地域の方だけでなく、本学園の短期大学と連携して探究の授業の企画を検討する。特に総合的な探究の時間においては、高大連携事業は本校通信制の特色にもなると考えられる。

#### 学校関係者評価

- ・校舎がある通信制高校が飯田女子高等学校通信制の魅力を感じる。ビルの中の通信制高校とは違い安心して学べる環境を大切にしたい。
- ・入学する生徒の多くは学校生活に不安や困り感を経験していると思われる。それらの生徒が通学できる通信制高校は地域には必要である。